

科学する心を育てる ～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

「心ゆくまでしたい遊びに取り組む幼児を目指して」



岡山県総社市立山手幼稚園

目 次

1	本園の概要	1
2	園内研究のテーマについて	1
3	「科学する心を育てる」について本園の考え方と 研究テーマとのつながり	1
4	研究の取組	2
5	実践事例	
	事例1「なくなった！」3歳児	3
	事例2「泡を作ってみたい」3歳児	4
	事例3「泥っておもしろい！」4歳児	6
	事例4「今日のニュース」 ～学級での振り返りに大型テレビを用いて～ 5歳児	8
	事例5「石けんのクリーム作りを通して」 ～自由に摘める草花や豊富な素材を用意することで～ 5歳児	11
	事例6「シャボン玉作りを通して」5歳児	15
6	成果と今後に向けて	19



学級での振り返りで、大型テレビを見る幼児

科学する心を育てる ～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～ 「心ゆくまでしたい遊びに取り組む幼児を目指して」

1 本園の概要

本園は田園風景の広がる岡山県の吉備路に位置し、園児数89名、3歳児32名2学級、4歳児28名1学級、5歳児29名1学級計4学級編成の中規模園である。職員構成は、園長1名、学級担任4名、支援員2名、預かり保育担当者3名、業務員1名である。

園区には、備中国分寺や作山古墳など歴史遺産が多数ある。園の周りには田畑が広がり、自然が豊かであるが、近年、住宅地が増え、94%の子どもは核家族であり、子ども達は家に帰ってからは伸び伸び戸外で遊ぶことは少ない。また、共働き家庭が増加しており、40%の子どもは預かり保育を長期休業中も含め、ほぼ毎日利用している。

保護者は、幼稚園教育に協力的で、子育てに関する情報収集や習い事などにも関心が強い。一方で、家庭では、家や服を汚さないように過ごさせたり、幼児が気付く前に言葉を掛けたりする等過干渉になりがちな保護者も少なくない。

幼児は、園では、明るく伸び伸びと活動することができ、身近な環境に進んで関わろうとする姿が多く見られる。しかし、中には、指示されたことはできるが、自分で考えて行動したり、自分のしたいことを選んで存分に遊んだりすることが難しい幼児もいる。

2 園内研究のテーマについて

園や保護者、幼児の実態から、幼稚園では、幼児がしたいことを自分で見付け、汚れたり失敗したりすることを気にせず、納得いくまで繰り返し取り組むことができる場を保障したいと考えた。そのためには、幼児が自ら身近な環境に働き掛け、主体的に活動できるよう、十分な時間を確保することや園内の環境に幼児が自ら働き掛け、幼児が興味のあることを見付けられるような魅力ある環境を用意することが必要であると考えた。

また、幼児が幼稚園で心ゆくまでしたいことに取り組み、様々な感情体験を重ねることで、幼児の心が動き、豊かな感性が育ち、自ら考えたり工夫したりしながら遊びや生活を創り出していくことができる。そこで、今年度の本園の研究テーマを「心ゆくまでしたい遊びに取り組む幼児を目指して」とし、環境構成の工夫の在り方から探っていくことにした。

3 「科学する心を育てる」について本園の考え方と研究テーマとのつながり

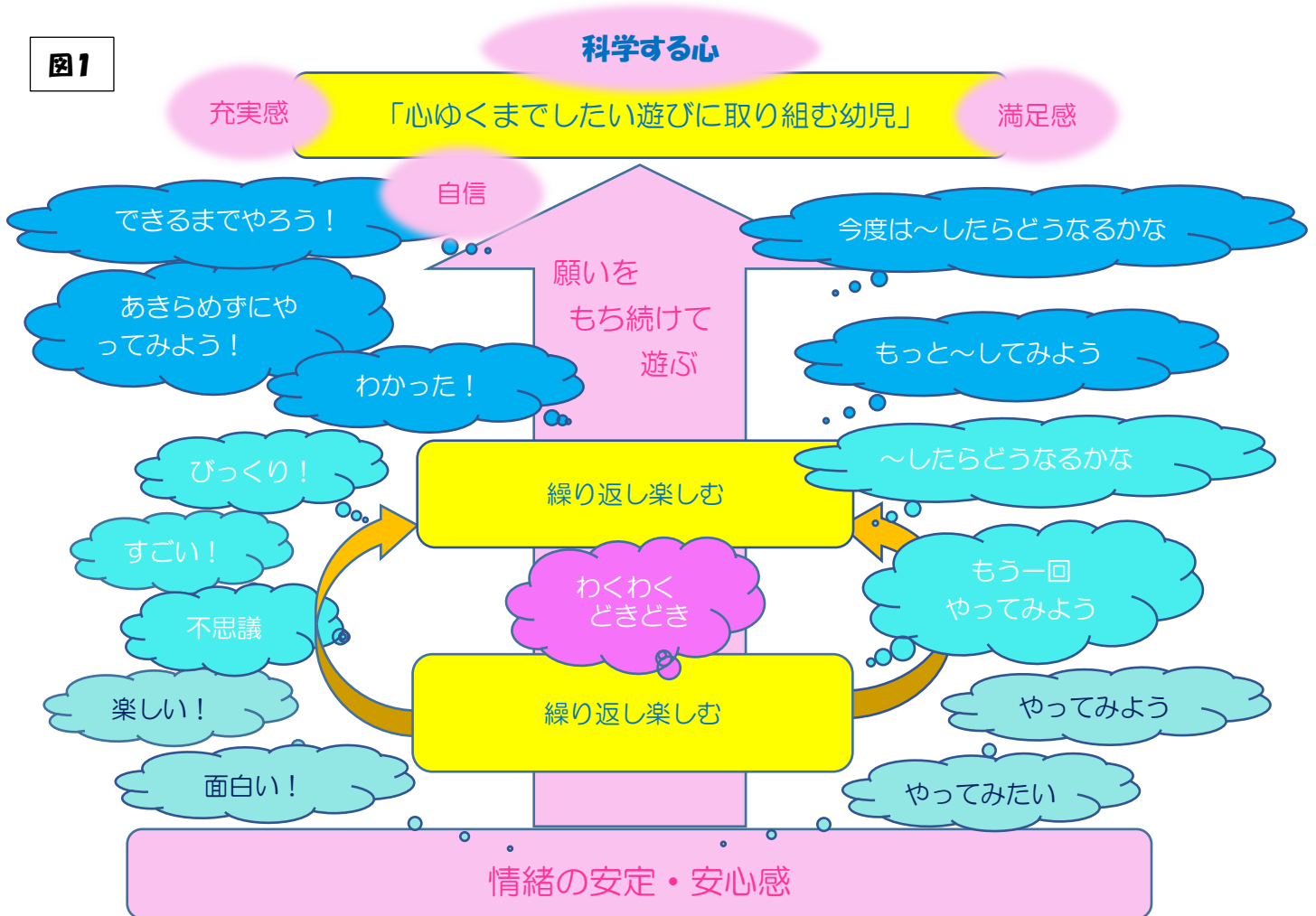
心ゆくまでしたい遊びに取り組む幼児とは、どのような感情を体験しているのか、どのような環境への関わり方をして、どのように育っていくのか図1のように考えた。幼児は、図1に示したような様々な感情を体験し、「わくわく・ときどき」しながら繰り返し興味をもったことを楽しむ。その中で「わかった!」「もう一回やってみよう」「もっと～してみよう」などと自分なりに考えたことを試したり考えたりしながらやってみようになる。その過程で必要なことは、幼児の情緒の安定や安心感と幼児が常に願いをもち続けて遊ぶことである。そして、幼児が図1のような感情を体験しながら、試したり考えたりを繰り返すことで幼児は、満足感や充実感を味わい、自信をもつ。つまり、心ゆくまでしたい遊びに取り組む幼児となると考える。

また、「科学する心」とは、どのような心と捉えるか園内で共通理解を行った。本園では、「科学する心」を、身の回りの出来事との関わりの中で、図1のような感情体験をし、ものごとに主体的に関わり、試行錯誤を繰り返して「できた!」「分かった!」「面白い!」「不思議!」等と感動する心であると捉えた。

このように考えると、本園で目指す「心ゆくまでしたい遊びに取り組む幼児」を育むために経験させたい感情体験は、「科学する心」を育む中で経験することと重なることが見えてきた。幼児が身近な環境に関わる中で、図1のような気持ちを感じることができるようにしていくことで、自ら遊びを創り出していき楽しさを味わい、知的好奇心、探求心など、すなわち「科学する心」が育くまれていくと考える。

そこで、本研究では、保育者が、日々の幼児の姿から幼児が感じていること、興味をもっていることを読み取り、翌日の保育につなげていくことを繰り返す中で、幼児が「～したい」という願いをもち続け、「わくわく・どきどき」心ときめく生活を送る、すなわち科学する心を育むことができるか、環境構成の在り方から探っていくこととした。

図1



4 研究の取組

(1) 研究テーマの幼児像に向かうために、職員間で本園の環境について話し合い、次の4点について実践する。

① 選んだ遊びの時間を十分確保する

- ・登園後に全員で体を動かす時間(週3回)をやめ、登園後はすぐに選んだ遊びをすることができるようになる。
- ・5歳児の当番活動を全員が毎日行うのではなく、当番のグループのみが行うようにする。

② 畑の見直しをする

- ・幼児が土を触って自由に遊べるように、何も植えない場所を作る。
- ・幼児が草花を摘んだり虫を探したりできるように、雑草園を作る。

③ 学級での振り返りの在り方を工夫する

- ・その日の遊びが翌日へと続き、遊びが深まっていくよう、振り返りの在り方を工夫する。

④ 自由に使える草花を増やす

- ・幼児が遊びに十分使うことができるように、園庭の端にクローバーや多種類の宿根の草花を植える。
- ・幼児が摘んで自由に使うことができるように、プランターに色が出やすい花や匂いのある草など遊びに使える草花を植える。

(2) 日々の保育において、「科学する心」につながる姿を共有したり、翌日の保育に向けての環境の再構成について必要に応じて、終礼で共有したり検討したりする。

事例1 「なくなった！」

3歳児

令和3年6月上旬

<保育者の願い>

保育者が一緒に遊びながら、幼児の気持ちに寄り添い、楽しさや面白さに共感することで、安心して遊んでほしい。

保育者も一緒に遊んだり、友達がしている遊びを知らせたりすることで、幼児が「面白そう」「やってみたい」という気持ちをもってほしい。

保育の展開と援助	幼児の姿の読み取り	保育者の思い
a 児と b 児が、校庭の土や木の枝をバケツに入れて混ぜている。c 児は、水が入ったバケツに土を入れる。c 児は、土が水に広がる様子を見て「シュワシュワ」と言う。①保育者は「本当だ。面白いね」と言い、一緒にやってみる。② c 児は「シュワシュワ」と言いながら、もう一度土を入れる。③ 保育者が「a 君、b 君見て。c 君、シュワシュワになったんだって」と言う。④ a 児と b 児も c 児の様子を見て、水を汲みに行く。⑤ 水を汲んで来ると自分のバケツに土を入れ「シュワシュワ」と言う。⑥ 保育者も一緒に「シュワシュワ」と言いながら何度も土を入れる。⑦ しばらく繰り返した後、c 児は、バケツの中の泥をすくって丸めながら「おにぎり」と言うが、すぐ崩れる。⑧それを見た a 児が「先生、おにぎりを作って」と言う。⑨ 保育者が泥を丸めて手渡す。⑩ c 児も「ほくも作って」と言う。保育者が、泥を丸めて作って手渡す。a 児、b 児、c 児は、次々「今度は大きいのがいい」「もう1つ作って」「三角にして」等、して欲しいことを保育者に伝える。保育者は、順番に泥を丸めて作ったおにぎりを手渡す。⑪ c 児が水が入ったバケツに泥を丸めたおにぎりを入れる。⑫しばらくして、「なくなった！」と言う。⑬ 保育者「本当だ！なくなったね」と言う。⑭ 周りにいた幼児が、泥を丸めておにぎりをつくったり、保育者の作ったおにぎりをバケツに入れたりする。「なくなった」「溶けた」など口々に言い、何度も繰り返す。⑮バケツの水が濁ってきたため、保育者が、水をたらいに入れて持って来る。⑯幼児は、たらいの周りに集まり、それぞれがおにぎりを入れる。「わあー！」と歓声をあげたり、「なくなった」「小さくなった」「溶けた」等、気付いたことを口々に言ったりする。⑰	①面白い！ ③もう一回やってみよう。 面白い！ ⑤面白そう！やってみよう。 ⑥c 児と同じようになった。面白い。 繰り返す ⑧おにぎりにならない。おかしいな。 ⑨うまくできないから先生に作ってもらおう。 ⑫もう一回やってみよう。繰り返す ⑬おにぎりが消えた！驚き ⑮わあ、消えた。 驚き もう一回したい。 面白い。 繰り返す ⑰面白い。	②c 児が面白がっていることを一緒にしてみよう。 共感・受容 ④c 児が面白がっていることを伝えよう。 ⑦水に土が溶けていく様子が面白い。幼児と一緒に楽しもう。受容 ⑩⑪幼児の思いが満たされるようにしよう。 受容・手助け ⑭幼児の思いに共感しよう。 ⑯バケツより大きな入れ物の方が、友達と一緒に泥が溶けていく様子をよく見える。



<考察>

- ☆ 幼児は、①、③、⑥のように、土が水に溶けていく様子を「面白い」と感じ、「シュワシュワ」と表現している。そして、繰り返し土や泥を丸めたもの（おにぎり）を水の中に入れて溶ける様子を楽しむことができた。これは、保育者が②のようにその面白さに共感したり、⑦のように一緒に楽しんだりしたことが要因の一つであると考ええる。
- ☆ 幼児は、繰り返し土や泥を丸めたもの（おにぎり）を水に溶かしてその面白さを周りの友達と一緒に感じることができた。これは、⑧のように思うようにできなかったときに、すぐに頼れる保育者がそばにいたこと、また、⑩⑪のように、幼児の思いが満たされるように手助けしてくれる保育者がそばにいたことが要因であったと考ええる。
- ☆ ⑬、⑮のように、幼児は「おにぎり」が溶ける様子を「面白い」と感じたり驚いたりしている。このように、「面白い」と感じたり驚いたりすることが、「もう一回してみたい」という気持ちにつながっていくのではないかと考える。
- ☆ ⑯のように保育者がたらいを用意したことで、幼児がたらいの周りに集まって、土が水に溶ける様子を同じ場で楽しむことができた。3歳児のこの時期に、「面白い」と感じることを友達と一緒に経験することが、後の友達と一緒に楽しいことをしよう！という気持ちにつながっていくのではないかと考える。

<〇前日までのd児の姿と♡保育者の願い>

〇 d児は、色水をコップからコップに移したり、コップからボウルに入れたりして、水の感触や色が混ざることを楽しんでいた。

〇 色水が少なくなったため、保育者がシャワーで色水を入れていた大きな入れ物に水を注いだときに泡ができた。d児はその泡に興味をもち、泡をすくってコップに集める姿が見られていた。

♡ d児の姿から保育者はd児が泡の面白さを感じていると読み取った。そこで、d児がやってみたいと思うやり方で泡作りを楽しんでほしいと願った。



保育の展開と援助	幼児の姿の読み取り	保育者の思い
前日に引き続き、d児は、何度も容器から容器へと色水移している。色水入れの色水が少なくなったので、保育者がシャワーで水を足す。d児は、補充している色水入れをじっと見つめ、「あ、あわあわができた」と言う。① 保育者は、「本当だ。泡ができた！面白いね」と言う。② d児は、泡だけすくって色水が入ったコップに何度も移し、③ 保育者に「見て」と笑顔で見せる。④ 保育者は「おいしそうだね」と言う。⑤ d児は何度も泡だけをすくってコップに入れ続ける⑥が、泡が消える。d児は「泡、作ってみたいな」と保育者に言う。 保育者「いいね。作ってみよう！⑦ どうしたらできるかな」と言う。⑧ d児は、「うーん。分からない」と言う。保育者は、「混ぜたらできるかな」と、ボウルに色水を入れて手で混ぜてみる。⑨色水が少し泡立つ。保育者が「見て、少し泡ができたよ」と言う。d児は「本当だ」と言い、自分も同じようにしてみる。⑩ (保育者は他児に呼ばれ、別の場に行く。別の場からd児の様子を見守る) d児は、ボウルに色水を入れて手やお玉で混ぜている。⑪ しばらくして、保育者がd児のそばに戻って来ると、d児は、のりの空き容器で泡を作っている。「dちゃん！すごい。いっぱいできているね。⑫どのようにして作ったの？」と保育者が尋ねると、d児は、「えっとね、が〜って混ぜたらできたんだよ」と答える。⑬ 保育者「その入れ物でしたらできたのね。どうしてボウルは使わないの？」と尋ねると、⑭d児は「(勢いよく混ぜると)水が飛んでいっちゃった」と答える。⑮ 保育者が「なるほど。dちゃん、すごいことに気が付いたね。」と言う。⑯ d児は、保育者の方を見て、にこっと笑い、再び手で色水を勢いよくかき混ぜて泡を作る。⑰	①泡ができた！面白い！ ③泡に興味をもっている。泡が面白いのだろう。繰り返す ④自分が「面白い」と思っていることを伝えたい。 ⑥泡が面白い。繰り返す ⑩手で混ぜたら泡ができるんだ！面白い。やってみよう。 ⑪もっとたくさん泡を作りたい。どうやったらできるかな。試す ⑬勢いよく水を混ぜると泡ができることに気付いている。 ⑮勢いよく水を混ぜるためには、のりの空き容器だと水がこぼれないことに気付いている。 ⑰嬉しい。もう一度泡を作ろう。面白い。繰り返す	②泡立ったのが面白いな。共感 ⑤気持ちを受け止めよう。受容 ⑦作りたい思いを実現させたい。共感 ⑧d児の考えたやり方で作らせた ⑨泡作りのきっかけにしたい。 ⑫泡がたくさんできている。自分の力で泡を作ったことがすごいな。 ⑭意図的にのりの空き容器を選んで使っているのだろうか。 ⑯自分で試してみ、泡を作るのにふさわしい容器に気付いたことがすごいな。



<考察>

☆ d児は「泡」に興味をもち、「泡」をすくうことを楽しんでした。しかし、「泡」がなくなると、自分で作りたいと保育者に伝えた。これは、「泡」が面白いから「もっとしたい」という意欲が生じたためであると考え。また、保育者は偶然にできた「泡」を面白いと感じるd児の気持ちを受容したり、共感したりした。幼児にとって、心のよりどころである保育者に受容されたり、共感してもらったりすることが、好きなことを十分楽しむことにつながると考える。

☆ 保育者は、d児が3歳児なりに試したり考えたりする経験ができるのではないかと考え、⑧のように声を掛けた。しかし、d児は作り方を考えることはできなかったため、⑨のようにきっかけを作った。保育者がd児の興味に寄り添い、作りたい気持ちに共感したり、作ることができるようにきっかけをつ

くったりしたことで、d児は、泡を作る面白さを知り、⑪のように自分なりに考えたり試したりすることができたのではない。

☆ d児は泡を作るために、入れ物や道具を使って試し、手で勢いよくかき混ぜると泡ができること、かき混ぜる際に入れ物の高さや口の大きさが関係していることに気付いた。

年齢が高くなると泡だて器などの道具を用いると思われるが、手で勢いよくかき混ぜるという方法は3歳児らしい発想であり、d児なりによく考えていると思った。このように、自分の思いを実現するために、自分なりに何とかしようと考えたり試したりすることが、4歳児・5歳児になったとき、自分の「願い」を実現するために繰り返し試したり工夫したりする姿につながると思われる。

また、保育者は、色水を色々な入れ物に入れて移し替えて遊ぶ際に、大きさや量に気付くことができる。のりの空き容器を用意していたが、d児の泡作りにとって、「遠心力で水が飛び出ないのりの空き容器」は、高さがあり口が狭い、という点で最適なものとなった。

d児が上記のような気付きをすることができたのは、幼児が選んだり試したりして遊ぶことができるよう、ボウルやコップ、のりの空き容器など色々な容器やお玉などの道具を用意していたことが要因であると考え。保育者が教材研究をしっかりと行い、用意する道具や用具について十分考えておくことの大切さを改めて感じた。

☆ ⑥、⑪、⑪のように、d児は、繰り返し泡をすくったり、泡を作ったりすることを楽しんでいる。このことは、何度も繰り返し遊ぶだけの十分な時間と場があったことが要因であると考え。

☆ 保育者は、幼児の気持ちを受け止めようと思って⑤のように声を掛けた。しかし、後から幼児が何を楽しんでいるのか、何を面白いと思っているのかよく考えたところ、「面白いね」という声掛けが適切であったのではないかと反省した。幼児にとって「泡ができること」が「面白い」のであって、「おいしそうなジュース」という思いではなかったのではないかと考える。

「なくなった!」、「泡を作りたい」を通して、幼児の経験していること



事例1、事例2から分かったこと

◎ 3歳児にとって、「面白い」と感じる環境を用意することで、幼児は自分から環境に関わり、繰り返し遊ぶことが分かった。また、「面白い」と感じると何度でも同じことをやってみようとすることも分かった。さらに、「面白い」という感情を繰り返し体験すると、「今度は～してみよう」と「試す」ようになるのではないかと考える。すなわち、「面白い」ことを繰り返し体験できるようにすることが、試したり考えたりすることにつながると分かった。

◎ 3歳児は、保育者が意図しないような事象を「面白い」と感じるものがしばしばある。土が溶ける様子や偶然できた泡のように、**幼児が「面白い」と感じたときを逃さず、受容したり共感したりして一緒に遊ぶこと**で、幼児は安心して繰り返し楽しむことができるのではないかと考える。

◎ 3歳児は、目の前にある道具、目の前にあるモノに関わり遊ぶことが多い。そのため、3歳児が考えたり試したりするためには、**試したり比べたりすることのできる道具や遊具を十分用意しておくことが必要である**と考える。その際、保育者は、**幼児がどのような活動を展開するか予想し、どのような道具や遊具がふさわしいか十分考えておくことが大切である**ことが改めて分かった。

◎ 3歳児のこの時期に、「面白い」と感じることを友達と一緒に経験することが、後の「友達と一緒に楽しいことをしよう!」という気持ちにつながっていく。

3歳児が、友達と同じ場で過ごす楽しさを感じたり、刺激を受けて遊んだりするためには、保育者がきっかけをつくったり、仲立ちとなったりすることが必要であると考え。



事例3 「泥っておもしろい！」

4歳児

令和3年5月下旬

<〇これまでの幼児の姿と〇保育者の願い>

- 〇 5月中旬、雨が降った後、園庭にできた水たまりではだしになって遊ぶ姿が見られた。5歳児が畑で遊ぶ姿をととてもよく見ており、同じようにして遊ぶ姿が見られていた。幼児は、場所によって冷たいところや温かいところがあることに気付いたり、泥のぬるっとした感触を楽しんだりしていた。
- ♡ 幼児が畑の土に触れ、汚れを気にせず、伸び伸び遊んでほしい。
- ♡ 水たまりや土場とは異なる感触を楽しんだり、不思議さを感じたり、試したり考えたりしてほしい。

幼児の気持ちの読み取り

幼児が経験していること

保育者の思い

5月26日（水）

数人の幼児が、はだしになり畑で団子を作ったり土を踏んだりして遊んでいる。それを見た数人の幼児が、次々とはだしになり、「僕もやりたい!」と言いながら、畑に入ってくる。①5歳児が事前に水を足していたこともあり、畑は田植えをする田んぼのようになっていた。「ぬるぬるする」「べちょべちょしている」と言いながら歩いたり「足が埋まる」「私の足も見えなくなった」と立ち止まって足が埋まっていくのを見たりしている。②

保育者はだし足になって一緒に畑を歩き回りながら、「べちょべちょしているね」「足が埋まってしまう」と言ったり、土から抜いた足を見て「こんなところまで茶色くなっているね」と幼児と見合ったりする。③



面白そう!

意欲

やってみたい!

楽しい、気持ちいい

気付き

面白い!

感触を楽しむ

楽しさを共有したい

繰り返す

5月28日（金）

朝から26日に泥遊びをした幼児数名がはだしになり④、畑で泥を丸めたり歩き回ったりして遊んでいる。足踏みをして「今日は土が硬い」「でも、ずっと踏んでいると柔らかくなるよ」等と気付いたことを伝え合う。⑤

保育者も一緒にはだしになり⑥「本当だ、前は柔らかかったのに今日は硬いね。不思議だね」と言う。⑦すると、⑧児が「そうだ!」と言い、砂場の道具が置いてある場所に行き、じょうろに水を入れて持ってきて、畑に流し入れる。⑨それを見た⑩児も同じように水をくんで来ては畑に入れることを繰り返す。水が入った土を見て「どろどろになったね」と⑩児と⑪児は言う。⑩そして、足踏みをして「べちょべちょになったー!」と言う。⑩



続きがしたい、楽しい

気付き

不思議さを感じさせたい

ひらめく

試してみよう

予想→試す

面白い。やっぱりどろどろになった

嬉しい。楽しい

予想通りになった嬉しさ

5月31日（月）

畑に入ろうとした幼児数名が、畑を見て、「ひびが入っている」とロクに言う。⑪保育者が「本当だね、硬いのかな柔らかいのかな」⑫とつぶやくと、幼児は次々畑の中に入り、「硬い」「すこしだけ柔らかいところもある」等とそれぞれが感じたことを言う。⑬保育者が「この間は柔らかかったのにどうして硬くなったんだろう」と問い掛ける⑭と、「う〜ん。」と言う。すると、同じ場で遊んでいた5歳児のA児が「お日様が当たりすぎると硬くなるんよ」と言う。⑮保育者が「なるほどね」と言うと、⑯児「そういうことか!」⑰児「天気良すぎたんだね」と言う。⑱そして、じょうろで水をくんで来て畑に水を入れ⑲、柔らかくなった泥に触れ、足踏みをしたり、泥を手に取り泥団子やおにぎり等を作ったりして遊ぶ。

どうしたのかな

気付き

硬さの違いに気付かせたい

気付き

伝え合い

分かった

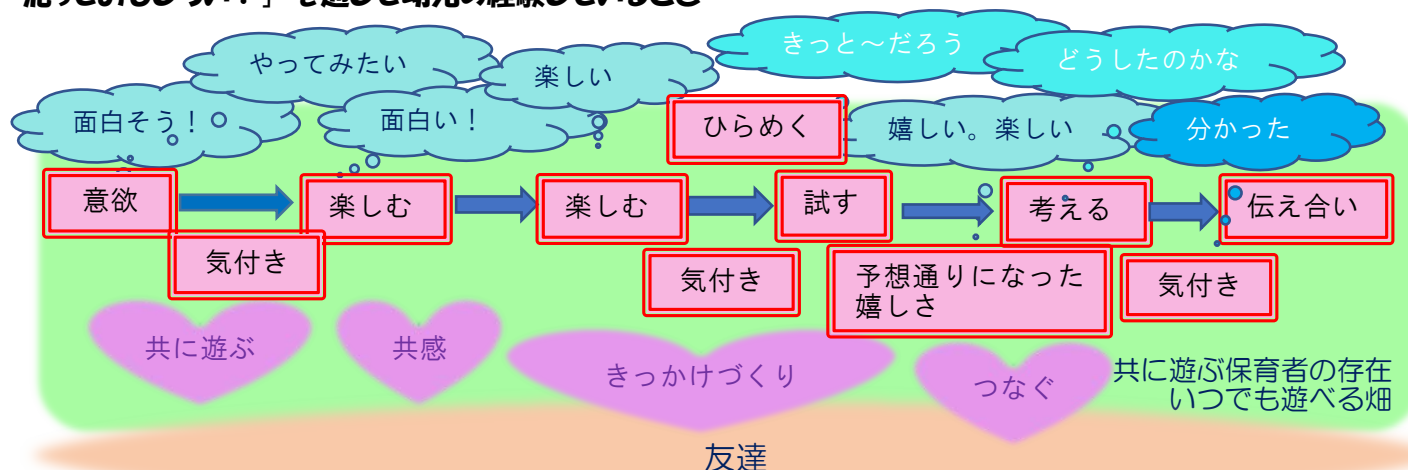
気付き

繰り返す

<考察>

- ☆ ①のように、「面白そう」「やってみたい」と自ら畑に入ったり、④のように、「続きをしよう」と思って土に触れて遊んだりする姿が見られた。そして、土に触れて遊ぶ中で、②、⑤のように、手で触ったり足で触れたりして感触を楽しんだり、感じたことを友達と伝え合ったりしている。このような経験ができたのは、畑の一角に自由に遊べる空間を意図的に設けたことが要因であると考える。
- ☆ 幼児は畑の土に触れて遊ぶ中で、次のような土の特性に気付いた。②、⑤のように土とは異なる土の感触、⑧、⑨、⑩のように、水を入れると「べちょべちょになる」こと、⑪、⑬、⑮、⑯のように、晴天の日が続くと「ひびが入る」こと等である。このような「気付き」をすることにより、幼児は「面白い」「どうしてかな」「分かった」「試してみよう」などと思いを巡らせ、繰り返し遊ぶことにつながるのではないかと考える。
- ☆ ⑭児は⑧のように、「水を入れると土が柔らかくなる」ということを予想して、水をくんで畑に水を入れている。これは、⑭児が今まで、土で遊んだり、園庭の水たまりの泥に触れて遊んだりした経験が生かされたのだと考える。⑭児と⑯児は、予想して試したことが思った通りになった嬉しさを十分味わったのではないかと考える。
- ☆ 幼児は、何日も続けて畑の泥に触れて遊んでいる。これは、③、⑥、⑦のように、一緒にはだして汚れることを気にせず泥遊びをして、「楽しい」「面白い」気持ちに共感したり、一緒に「不思議だな」と感じたりする保育者の存在があったことが一因であると考える。
- ☆ 保育者は、幼児に試したり考えたりして遊んでほしいと考えていた。そのため、土の硬さや水を入れると感触が変化することなどに気付かせたいと考えていた。そこで、⑪のように幼児が発言した際、⑫のような声掛けをした。しかし、幼児の実態は、試したり考えたりするより、感触を楽しんだり、発見を喜んだりするようであった。保育者の思いが先行し、幼児の実態に即した声掛けができなかったことを反省した。
- ☆ 保育者が⑭のように、遊んでいる場の幼児に聞こえるような問い掛けをすることで、5歳児が⑮のように発言し、4歳児は⑯のように気付きをすることができた。気付きを深めたり、試したりするためには、友達や5歳児の存在が大切であると考える。そのため、保育者が幼児同士をつなぐ役割を果たすことの大切さを改めて感じた。

「泥っておもしろい！」を通して幼児の経験していること



事例3から分かったこと

- ◎ 幼児は、興味をもって自分から「面白そう」「やってみたい」と思って関わったことに繰り返し取り組む。そして「楽しい」「面白い」という感情を繰り返す中で様々な「気付き」をする。また、繰り返し遊ぶ中で、土の特性に気付き、予想して試すようになる。そして、予想して試したことが思う通りになったことで、「予想通りになった嬉しさ」を味わう。このような経験を重ねていくことで、幼児は、モノの特性や仕組みなどに気付き、自分の知識としていくのだと考える。**興味をもった幼児がいつでも関わることができるように畑の一部を土で遊べる場にすることが、幼児が繰り返し遊ぶ姿につながったと考える。**
- ◎ 4歳児にとって、保育者が一緒にはだして遊び、感触の気持ちよさを共有したり、不思議に思うことに共感したりすることで、より興味や関心をもって遊び続けることになったと考える。**幼児が何を「面白い」「楽しい」と感じているのか、幼児の姿から思いを読み取り、楽しさや面白さなどに共感する保育者の存在が大切であると分かった。**
- ◎ 4歳児にとって、一緒に遊ぶ友達がいること、友達の発言から自分も気付いたり不思議に思ったりすることが、繰り返し遊ぶことに必要な要因の一つであると考える。**幼児が気付いたり、不思議に思うたりするきっかけをつくったり、友達同士をつないだりする保育者の環境としての役割が重要であると分かった。**幼児だけでは気付かないことにも気付くきっかけをつくることで、幼児の「どうして?」「不思議」などと感じる科学する心の基礎を培うのではないかと考える。

事例4 「今日のニュース」～学級での振り返りに大型テレビを用いて～

5歳児 令和3年5月～令和3年7月

【♡幼児の実態と保育者の願いと◆環境構成】

- ♡ 5歳児の学級は在籍数が29名と多く、友達や保育者の話を聞くだけでは理解しにくかったり興味をもちにくかったりする幼児もいる。一方で、興味があることには一生懸命取り組んだり、探求心をもって遊んだりする幼児が多い。幼児が、友達や保育者の話に関心を持ち、意欲的に学級での振り返りに参加することで、自分は参加していなかった遊びに興味をもったり、「明日も続きがしたい」「明日はもっとこうしたい」などの願いをもったりしてほしい。
- ◆ 遊びの様子や幼児が発見したことを保育者がビデオを撮り、「今日のニュース」として振り返りの時間に大型テレビで見せることにする。

5月11日（火） 保育の展開と援助	幼児の姿の読み取り	保育者の思い
保育者が撮影した映像をみんなで見ることを伝える。保育者「今日、とても美味しそうな料理を作った人がいるから、それを見せてあげるね」と言い①、モンステラの葉をランチョンマットに見立て、花を刻んだりすりつぶしたりしてごちそうを作った様子（写真1）を見せる。幼児が、「わぁ。かわいい」「美味しそう」「誰が作ったん？」と口々に言う。② 保育者「Aちゃんが作ったんだよ。大きな葉っぱがランチョンマットになってるよね。いい考えだね」と言う。③ 保育者「次のニュースは、とっても小さい虫のニュースだよ。『アブラムシが見えない。どこにいるか分からない』ってB君が言っていたから、ビデオに撮ってみたよ。」と言い、アブラムシを撮影してズームで大きくしたもの（写真2）を見せる。④ 幼児は口々に「どこ？」「どこ？」と言ったり、身を乗り出して「あの小さいの？」「見えない！」などと言ったりする。一時停止をして画面を指さして、「これだよ」と言う。すると、幼児は「わぁ。小さい！」「いっぱいいる」などと口々に言う。⑤ 「先生、カエル、アブラムシ食べてる？」とC児が言う。⑥ 保育者「どうか。食べていると思うんだけど」⑦と言う。 B児「食べてるよね。きつ」とC児「うん。食べてるよ」と言う。	②ごちそうに興味をもって見ている。  写真1 ⑤アブラムシってこんなに小さいんだ。これがアブラムシなんだ！ ⑥前にカエルがアブラムシを食べると図鑑に書いてあった。カエルの飼育ケースにアブラムシを入れているけれど、本当に食べるかな。	①③大きな葉っぱをランチョンマットに見立てたA児を認めることで自信につなげたい。 ④アブラムシが小さくて、どこにいるか分からない幼児が多いので、大きくして見せたら分かりやすいのではないか。 ⑦子ども達にカエルがアブラムシを食べているところを見せてやりたいな。

写真2

<考察>

- ☆ 大型テレビに映し出される遊びの様子や生き物を見て、幼児は②、⑤のように思ったことを口々に言う姿が見られた。このことから、保育者が大型テレビで映像を見せたことで、幼児は友達遊びや生き物の様子により興味や関心をもつことになったと考える。
- ☆ カエルを捕まえた幼児が飼育方法を図鑑で調べて、アブラムシを食べることが分かった。そこで、数人の幼児がアブラムシのついたハルジオンやカラスノエンドウを持って来て、飼育ケースの中に入れておいたが、アブラムシを知らない幼児も多かった。そこで、ビデオカメラで撮影して見せることで、大きくして見せたり、一時停止をして、アブラムシをじっくり見せたりすることもでき、多くの幼児が⑤、⑥のように興味をもって見ることができたと考え。
- ☆ カエルがアブラムシを食べる瞬間を見た幼児がいなかったため、⑥のように疑問を抱く幼児が出てきた。カエルがアブラムシを食べるところを撮影して幼児に見せることができると、カエルへの興味や関心がより深まるのではないかと考えた。

5月12日(水) 保育の展開と援助	幼児の姿の読み取り	保育者の思い
【選んだ遊びの時間】 C児がカエルを見に来たため、保育者は一緒にカエルを見ながらビデオを撮影する。⑦ そばにいたD児もカエルを見に来る。3人でカエルを見ていると、C児「カエルさん、アブラムシ、食べるかな？」D児「食べるよ。一緒に見とこう」と話していると⑧、カエルがバクッとアブラムシを食べる。C児「食べた！」D児「今、食べたよね!？」と顔を見合わせる。⑨ 保育者「食べたね。今、食べたね!」と言う。⑩ C児とD児は大興奮で、近くで遊んでいる友達に、カエルがアブラムシを食べたことを知らせる。⑪ 【振返りの時間】 C児がカエルがアブラムシを食べたことを話す場を設け、撮影したビデオを見せる。(写真3)大型テレビに映し出されたカエルが一瞬にしてアブラムシを食べる様子を見て、幼児は口々に「うわっ!」「すごい!」「大きい目!」「食べた!」「今、ほんとに食べた!」「(自分ののどを押さえて)ここが動いとった!」「ペロがびょーんって伸びた!」など口々に感じたことを言う。⑫ よく見えなかった幼児もあり、「見えなかった。」「いつ食べた?」「巻き戻して、一時停止して」との声が上がり、何度か巻き戻して見せる。	⑧アブラムシを食べることを期待している。 ⑨本当に食べた!すごい!驚いた! ⑪すごいニュースをみんなに知らせたい。本当にアブラムシを食べたことが嬉しい! ⑫カエルの口が大きく開いて舌が伸びてアブラムシを食べるという動き、のどの動き、カエルの目の大きさなどに気付いている。	⑦カエルがアブラムシを食べる瞬間を撮影出来たらいいな。 ⑧カエルが食べるといいな。 ⑩本当に食べた。驚いた。 写真3

<考察>

- ☆ カエルがアブラムシを食べた瞬間を見た幼児の感動を話だけでは共有することが難しいと思われたが、動画を見せることで、感動を学級で共有することができた。大型テレビで見せたため、今まで使っていた虫眼鏡で見るよりさらに大きく見え、個々の幼児がそれぞれの視点でカエルの特徴に気付くことができた。また、カエルはアブラムシを食べる、と図鑑に書いてあったことを目の当たりにすることで、幼児の驚きや感動はより高まったのではないかとと思われる。
- ☆ 動画を見せることで、友達の話だけでは興味をもちにくい幼児も興味をもって見る事ができた。また、ビデオカメラを使うことで、繰り返し見せたり、一時停止して幼児の見たいところを見せたりすることもできた。

6月初旬の保育の展開と援助

「今日のニュース」が定着してきて、うんていで最後までいけるようになったり、畑のズッキーニの赤ちゃんを見付けたりする(写真4)など、頑張ったことがあったり、皆が知らないことを「発見」したりした際には、「今日のニュースで皆に知らせて」と保育者に伝える幼児が増えてくる。保育者は、幼児の思いを受け止め、遊びの様子を「今日のニュース」で知らせるようにした。固くて光る泥団子や砂場でつなげたトイをロケットが流れて跳び上がる様子(写真5)など、自分が遊んでいなかった場の様子に興味をもって見る幼児が多く、翌日その遊びをしてみようとする幼児の姿が見られるようになってくる。また、その場で遊んでいた幼児はビデオを見ながら、自信をもって団子の作り方や遊んでいた様子を話す姿が見られる。



写真4



写真5

6月下旬の保育の展開

幼児は石けんをすりおろして、水やすりつぶした花を混ぜ、青、濃い青、紫、水色、茶色などのクリームを作り、ケーキの飾り付けに使ったり、カップに入れてムースにしたりしている。「〇色を作る」と自分なりの目当てをもって取り組む幼児が多く、花や葉を選んだり花の量を考えたりする姿が見られている。E児とF児は緑色のクリームが作りたくて、何日も試行錯誤を重ねているがなかなか思うような「緑色のクリーム」ができないようであった。

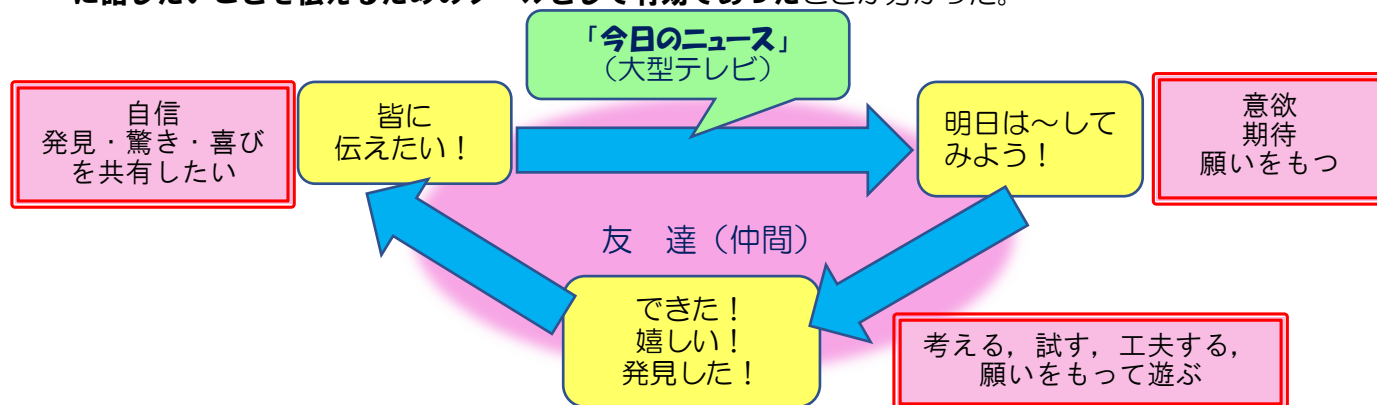
6月29日（火）保育の展開と援助	幼児の姿の読み取り	保育者の思い
保育者「今日はとってもきれいな石けんのクリームを作った人がいたんだよ。」幼児「青色のクリームでしょ?」「水色?」「抹茶?」などと言う。⑬保育者「抹茶のソフトクリームみたいなのができていたの」と言い、ビデオを見せる。⑭ 「それ、見た!」「見た!」と言う幼児や「すごい!」「何で作ったん?」⑮と言う幼児がいる。保育者が緑色のクリームを作っていたE児に尋ねるとE児は「クローバー」と答える。一緒に作っていたF児が「そうよ。滑り台の下のクローバー、取ってきたんよ」と得意気に言う。⑯ C児「どのくらい入れたん?」と言う⑰と、F児「いっぱい」と言う。保育者が「いっぱいクローバーを入れたら、本当の抹茶クリームみたいになるんだね。美味しそうだね」と言う。⑱ D児「私も明日作ろう!」と言う。⑲	⑬青色なら知っている。どんな色だろう。と期待している。 ⑮緑色のクリームはどうやったらできるんだろう。 ⑯みんなが作ったことのない濃い緑色ができて嬉しい。 ⑰ぼくも明日やってみよう。 ⑲青色や紫色のクリームは作ったことがあるけど緑色はない。やってみよう。	⑭今までにない濃い緑のクリームができたことを知らせたい。E児とF児が連日、試してついにイメージする緑ができたことをみんなにも伝えたい。 ⑱明日作ってみたいと思う幼児がいたらいいな。

<考察>

- ☆ 動画で緑色のクリームを見た幼児は鮮やかな緑色に驚いた。また、⑮、⑰のように材料や分量を尋ね、⑲のように自分も作ろうと「願い」をもつきっかけとなった。動画を見せたことで、幼児の驚きや感動がより高まり、「自分ももっとやってみたい」と思う姿となる等、より意欲を高めることにつながったと考える。
- ☆ 6月下旬から7月初旬まで、多くの幼児が石けんのクリームに花や葉をすりつぶしたもので色を付け、水色、茶色、緑色のクリームを作ったり、白色と青色のクリームを交互に入れたりして、クリームの色に関心をもって遊ぶ姿が見られた。このように、「色」に興味をもち、色々な色を作るために材料を選んだり、材料の量を試したりしてじっくり遊ぶことができたのは、振り返りで友達の遊びの様子を動画で見せたことも要因の一つであると考えられる。

事例4から分かったこと

- ◎ 学級での振り返りで、「今日のニュース」として、遊びの様子等を大型テレビで見せたことにより、幼児は、友達のしていることに興味をもち、自分もやってみようとするきっかけとなった。また、聞くだけでは話し合いに参加しにくい幼児も、可視化されることで、学級での話し合いに興味をもって参加することにつながった。幼児にとって、**可視化は興味や関心をもつきっかけづくり**に有効であることが分かった。
- ◎ カエルやアブラムシなど生き物の様子、畑の野菜の様子など、言葉だけでは伝わりにくいことや生き物のそのとき、その瞬間の様子などを幼児に知らせたいときに、動画を一時停止したり、再度見せたりすることができ、興味をもった場面をじっくり見ることもできた。**生き物や植物などの様子を学級全体で共有する際に、ビデオカメラで撮影し、大型テレビを活用することが有効であることが分かった。**
- ◎ 幼児が、友達に石けんのクリームの「青色」「濃い青色」「薄い緑色」「抹茶の緑色」など微かな加減を伝える際、大型テレビでクリームの色そのものを見せることで、「濃い青色」ってこんな色、「薄い緑色」ってこんな色のことだ、と共通理解することができた。そのため、自分も今度は「〇色のクリームを作ろう」と自分なりの願いをもって遊びに取り組むことにつながった。
可視化することにより、幼児は、「明日はこれをしよう」「明日はこうしてみよう」など翌日の遊びの「願い」が明確になり、考えたり試したりして遊ぶことにつながることが分かった。
- ◎ 遊びの中で発見したことや嬉しいことがあると「今日のニュースで見せて（皆に知らせて）」と言う幼児が増えてきた。「今日のニュース」でみんなに動画で知らせたいという思いをもち、その場で、自分なりの言葉でみんなに伝えようとする事ができたのは、ほぼ毎日、大型テレビを用いた振り返りを続けてきたためであると考えられる。**幼児にとって、大型テレビを用いた振り返りが、友達に話したいことを伝えるためのツールとして有効であったことが分かった。**



事例5 「石けんのクリーム作りを通して」～自由に摘める草花や豊富な素材を用意することで～

5歳児 令和3年6月中旬～令和3年7月

【♡保育者の願いと◆環境構成】

- ♡ 幼児が試したり考えたりして遊ぶ中で、自分のイメージしたものができた嬉しさや発見した喜び、不思議さなどを感じてほしい。
- ◆ 幼児が試したり考えたりして繰り返し遊び込むことができるように、石けんや花などの材料を十分用意したり、幼児と一緒に花を探しに行ったりする。また、自由に使える草花のプランターを遊びの場の近くに置いておく。
- ◆ 選んだ遊びの時間を十分確保する。

6月14日（月） 保育の展開

5歳児十数人が、昨年度の経験から、石けんをおろし器ですりおろし、水を入れて、泡立て器で泡立て、「クリーム」を作っている。A児は、石けんの白いクリームに色を付けようと、テルスターの花をすり鉢ですりつぶし、泡立てたクリームに入れる。すると、赤い色水が一瞬にして紫色に変わる。それを見たA児は声を上げて驚く。周りにいたB児、C児らも驚く。

6月15日（火） 保育の展開と援助	幼児の姿の読み取りと保育者の思い	幼児が経験していること
C児はボウルにそのまま赤い花びらを入れて混ぜる。C児「あれ？色が変わらないな」と言いながら混ぜる。① B児は、ミントをすりつぶし、クリームに入れる。B児「先生、いいにおい！ミントグリーンになったよ」②と保育者に見せる。 A児は昨日と同様、黙々とゼラニウムの赤い花をすり鉢ですりつぶしている。③ 保育者もA児と同じようにしてすり鉢ですりつぶし、白い石けんの泡の中に入れる。④ すると、色が青色になる。青色のクリームを見たC児が「先生、どうやったの？何で色が変わったの？」と尋ねる。⑤保育者がどうやったか知らせると、C児は「私もやってみよう」と言い、赤いゼラニウムをすりつぶしてボウルに入れる。色が変わると「やったあ。青になった。不思議～」と言う。⑥ A児もすりつぶした赤いゼラニウムに水を入れ、ボウルに入れると赤い色水が石けんのクリームを混ぜると、一瞬で青色に変わる。それを見ていた周りの幼児が「どうして？」「不思議～」「すごい！」と口々に言う。⑦	①昨日のA児の様子を見ていて、赤い花を入れると青になると予想していたのだろう。すりつぶさないで色が変わりにくいことにも気付かせたい。しばらく見守ろう。 ②ミントの匂いに気付いたり、色が変わったことを喜んでいたりしている。 ③花をすりつぶして水を入れて石けんに入れると色が変わることには気付いている。 ④赤い花を入れると青いクリームになる不思議さに気付かせたい。 ⑤どうやったのか知りたい。作りたい。 ⑥⑦赤い花を入れると青いクリームになることを不思議に思ったり面白く思ったりしている。	予想して試す→失敗 ミントの匂いに気付く 予想して試す なぜ予想したとおりにならなかったのか気付く 不思議に思う 面白いと思う 驚く 発見

<考察>

- ☆ ミントのプランターを自由に使えるようにしておいたことで、幼児が花で色を付けるだけでなく、葉を使ってみようとするにつなげた。また、匂いのある草花を植えておくことで、匂いに気付くことにもつなげた。匂いがあることで、幼児はより関心をもって、遊びに取り組んだのではないかと考える。
- ☆ 保育者は、「赤い花を入れたのに青い色になった」という不思議さや驚き、面白さを感じることで、幼児が「試してみよう」「～を入れたらどうなるかな」「～したらどうなるかな」などと考え、試したり考えたりしながら遊ぶのではないかと考え、④のように関わった。保育者は、幼児が保育者の様子を見て、自分のやり方との違いに気が付き、「すりつぶして入れる」と言うことに気付いてほしいと考えた。しかし、⑤のように、「作りたい」という願いをもち、保育者に尋ねた。うまくいかないと諦めることが多いC児に成功体験を味わわせたいと考え、保育者はやり方を伝えた。すると、⑥のように自分で試し、青色に変化する不思議さを感じるにつなげた。

このように、C児は、自分でやってみて、色が変わる不思議さを味わうことができた。最初、うまくいかなくても、再度挑戦することができたのは、一緒に遊ぶ保育者がやり方を知らせたことがきっかけであったのではないと思う。

6月21日（月） 保育の展開と援助	幼児の姿の読み取りと 保育者の思い	幼児が経験して いること
D児とE児は、濃い青色のクリームを作ろうと、赤いゼラニウムの花の軸を取り、花びらのみすり鉢でつぶして⑧、二人で相談しながら作っている。⑨ F児とG児は、「シソ（の葉）で作ったら緑になるかな」と言い⑩、すり鉢でつぶしている。すり鉢でつぶしたシソは薄茶色になっている。⑪ F児「なんか茶色くなってきた。でもクリームに入れたら緑色になるかもしれないよ」⑫ G児「そうだね。やってみよう」と言い、白い石けんのクリームに入れる。F児「うわぁ。茶色っぽい色になった」と言い、「先生、シソ入れたら、茶色っぽい色になったんよ」⑬と知らせに来る。保育者「本当？シソは緑なのにね」と言う。⑭ G児「うん。でも茶色っぽい色になったよ」	⑧より赤い色を出そうとしているのかな。 ⑨友達と一緒に作る楽しさを味わうようになってきた。 ⑩もっと試してみよう。 ⑪アグが出たのかな。思ったような緑色ができなかったな。どうするだろう。 ⑫緑色になることを期待している。 ⑬緑のシソの葉を入れたのに茶色っぽくなったことに驚いた。驚きを知らせたい。 ⑭不思議さや驚きに共感しよう。	幼児が経験していること 考えて試す 友達と意思を出し合う 興味が花から葉へ 試してみる 驚き不思議に思う発見

<考察>

- ☆ 赤い花をすりつぶして入れると青色のクリームができることが分かったD児とE児は、より濃い青色のクリームを作るために、花びらだけを使おうとしている。繰り返し遊ぶ中で、「濃い青色のクリームを作りたい」という願いを実現するために、考えながら遊んでいる。また、F児とG児は、色に関心をもち、緑色のクリームを作ろうと考えている。どちらも、十分な時間や材料があるため、幼児が考えたり試したりしながら遊ぶことができたのだと考える。
- ☆ 遊ぶ中で、「濃い青色ができるだろう」「緑色になるだろう」と予想して遊ぶことで、うまくいったとき喜んだり、思うようにならなかったときは不思議さを感じ、どうしたらできるか考えたり、さらに試してみる意欲につながると考える。
- ☆ 今週になり、友達と一緒に共通の願いをもって遊びに取り組む姿が増えてきた。友達と一緒にすることで、より考えを深めたり、試す楽しさやうまくいったときの喜びを共有したりすることができると考える。シソが茶色っぽい色になり保育者は、幼児が思った色にならずに残念がるかと思ったが、幼児は、友達と一緒に不思議に思い、驚いていた。不思議さや驚きを共有する友達の存在の大きさを感じた。

6月24日（木） 保育の展開と援助	幼児の姿の読み取りと 保育者の思い	幼児が経験して いること
マリーゴールドを使って黄色のクリームを作ったD児とH児は、黄色のクリームと白色のクリームと青色のクリームを交互にカップに入れパフェを作る。出来上がったパフェを「先生、見て。今日は黄色いクリームができたからパフェを作ったの！」と二人で見せに来る。⑮ 保育者「すごい。美味しそう。黄色のクリームは何で作ったの？」D児「あの黄色い花」保育者「マリーゴールドだね。黄色の花は黄色のクリームになるんだね。みんなに見てもらえるように、机の上に並べてみる？」と言う。⑯ D児、H児「うん！」と言い、テーブルの上に置く。それを見たB児が「美味しそう！オレンジのパフェ？」と尋ねる。⑰ D児が「レインボーのパフェなんよ」と答える。 近くにいた幼児は、作ったデザートを机の上に持って来て並べ始める。友達の作ったデザートを見て、「黄色いクリーム作ってみよう」と言う幼児や同じようにケーキを作る幼児も出てくる。⑱	⑮今までにない黄色のクリームができたのが嬉しいのだろう。パフェをイメージして、飾り付けやクリームの色などを考えて作っている。 ⑯互いに色や作った物の刺激を受けることができるように、置く場所を作ってみよう。 ⑰今までになかった黄色のクリームに興味をもったのだろう。 ⑱友達の作ったものを見て、同じようにしてみたいと思っている。	幼児が経験していること 試す 考える工夫する 友達のしていることに興味をもつ 試す工夫する

写真：ユスラの実を飾り付けにふんだんに使い、よりリアルなケーキを作る

<考察>

- ☆ クリームの色に興味をもっている幼児が多いため、さらに「やってみよう」「試してみよう」と

思って遊びに取り組むことができるように、花壇のマリーゴールドを遊びに使えるようにした。そのため、幼児は「黄色（オレンジ）の花を使ったらどんな色のクリームになるかな？」と考えたり、「黄色（オレンジ）の花を使ったら黄色（オレンジ）のクリームができる」と予想したりして、クリームを作ったのだろう。「やってみたい」「試してみたい」と思えるような材料を用意しておいたことにより、幼児が意欲的に「どうなるかな」とわくわくしながらクリームを作ることに繋がったと考える。

- ☆ 幼児がケーキ作りに使いたいとユスラの実を持って来たことで、ケーキの飾り付けをする際に、より本物のように飾り付けをすることができた。5歳児にとって、よりリアルなものを作ることができると、遊びに夢中になるのではないかと考える。
- ☆ できたパフェやケーキを置く場所を一か所にしたこと、⑰、⑱のように、幼児が友達の作ったデザートに興味をもち、自分もやってみようとする気持ちに繋がったと考える。

6月25日（金） 保育の展開と援助	幼児の姿の読み取りと 保育者の思い	幼児が経験していること
E児が緑色のクリームを作るために、ミントをすりつぶしている。⑰すりつぶしたものを白い石けんのクリームに入ると薄茶色になる。E児は納得がいけないような顔をして、今度は、ユスラの葉をすりつぶして入れることにする。⑱そばにいたH児も一緒に作る。すりつぶしたユスラの葉は緑色で、クリームに入れると、クリームが薄い緑色になる。E児は満面の笑みで、「見て！」と保育者に薄い緑色のクリームを見せる。⑲保育者が「すごいね。緑色だ！⑳何を入れたの？」と尋ねると、E児は、「この葉っぱ」とユスラの葉を指さす。 	⑲E児は色に興味をもっていたから緑色を作ろうとしているのだろう。自分なりに考えて試している。 ⑳緑色を作りたいのだろう。あきらめずに試している。 ㉑思った緑色ができて嬉しい。満足している。 ㉒緑色を作ろうと諦めずに取り組んだことを認めたい。	幼児が経験していること 願いをもち続ける 考える 試す 考える 試す

<考察>

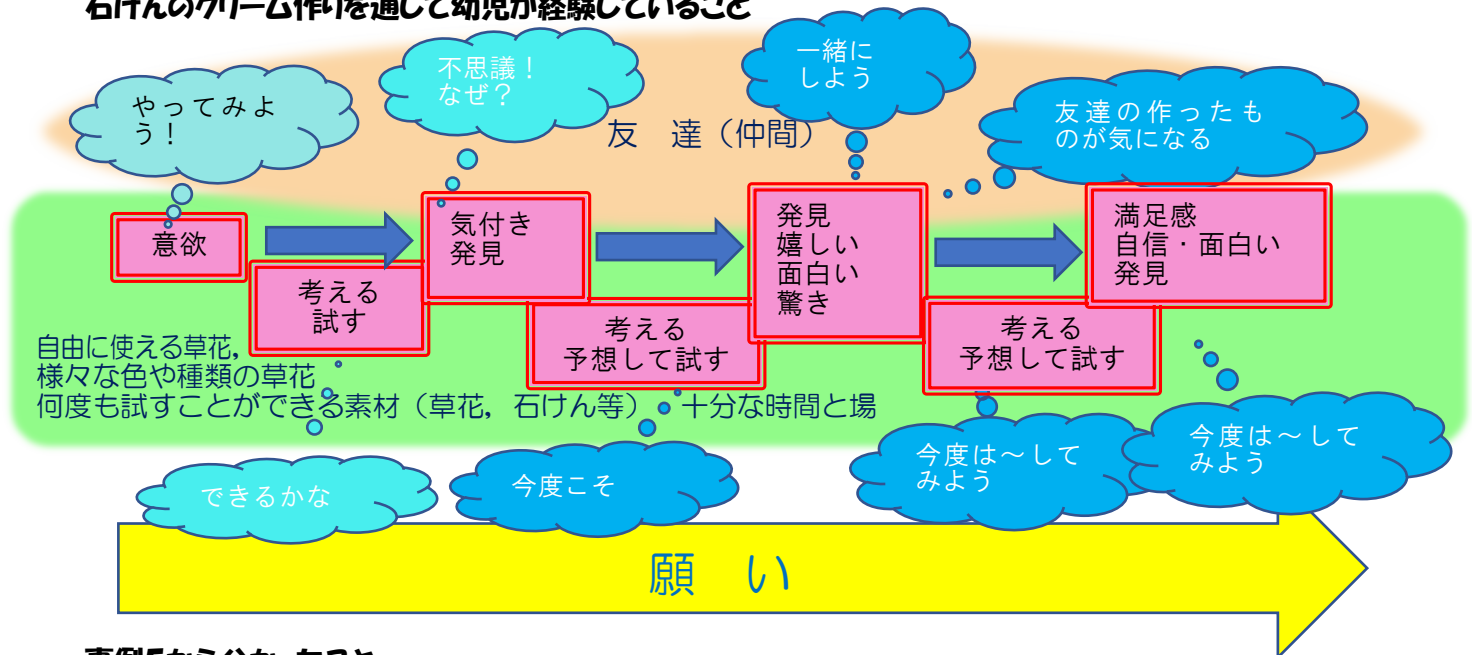
- ☆ E児は、この日、登園後すぐに石けんのクリーム作りに取り掛かり、ミントを使って緑色のクリームができなくても諦めずに、1時間くらいかけて、ユスラの葉を使って緑色のクリームを作ろうとしていた。試してみる十分な時間があつたことや、色々な材料（ミント、シソ、ユスラなど）があつたことが試すきっかけになったと思われる。
- ☆ 保育者は、幼児がユスラの葉を使うとは予想していなかった。ユスラの実が枝にどのように付いているか幼児に見せたい、と思って実も葉も付いた枝をバケツに入れて置いておいた。幼児にとっては、置いてあるモノ全てが環境になるということに改めて気付かされた。
- ☆ 保育者もミントの葉をすりつぶしたときに茶色になることは、このクリーム作りを通して気付いたことであった。ミントやシソはアクがあるから色が変わるが、ユスラはアクが出ず、緑色のままであつたのだろう。保育者自身が幼児と一緒に試す中で、自然の面白さや不思議さに気付かされるが多かった。

6月29日（火） 保育の展開と援助	幼児の姿の読み取りと 保育者の思い	幼児が経験していること
昨日に続き、今日もA児、E児、G児、H児は、緑色のクリームを作ろうとユスラの葉やミントの葉をすりつぶしている。㉓H児がクローバーを取って来て、すり鉢ですりつぶす。㉔それを見たA児が同じようにクローバーを取って来る。すりつぶしながらH児は「石けん入れてないのに、泡が出るし、ねばねばしてる」と興奮気味に言う。㉕A児もすり鉢ですりつぶしながら「水を入れてないのに、泡が出た！」と言う。㉖すりつぶしたクローバーを石けんの中に入れて混ぜると、泡立った濃い緑色のクリームになる。H児「見て、見て！抹茶（のクリーム）ができた！」と保育者に見せる。㉗保育者「すごいね。こんな緑のクリームを見たのは初めて！本物の抹茶クリームみたいだね」と言う。㉘ 	㉓昨日の緑色のクリームを再現しようとしている。 ㉔昨日よりさらに緑色のクリームを作ろうとしている。 ㉕今までの葉との違いに気付いている。 ㉖A児もクローバーと今までの葉との違いに気付いている。 ㉗満足のいく緑色のクリームができた。見てほしい。 ㉘D児やH児がイメージした緑色のクリームだろう。しっかり認めよう。	幼児が経験していること 願いをもち続ける 考える 試す 葉の性質の違いに気付く（発見） 満足感「願い」が達成できた自信

<考察>

- ☆ 緑色のクリームができるようになったことが嬉しく、「今日も作ろう」と思って取り組む幼児が多い中、H児は「もっと濃い緑が作りたい」という願いをもっていただと考える。その願いを実現するために、まだ使ったことのない緑色のモノを考えて、クローバーを思いついたのだと思う。幼児が自由に使えるクローバーなどの草花を植えておいたことで、幼児が自らやってみるきっかけとなったと考える。
- ☆ 幼児は、クローバーの葉をすりつぶす際、ミントやシソとは違う粘りがあることに気付いた。今まで色々な草花をつぶしてきた経験から、違いに気付くことができたと考える。
- ☆ 幼児はクローバーをすりつぶしている際に②⑤、②⑥のように泡が出てくることに気付いた。このことは、幼児にとっては「大発見」であったのではないかと考える。このような発見をすることが、幼児のさらに試してみたい、もっと知りたいという気持ちにつながるのではないかと考える。

石けんのクリーム作りを通して幼児が経験していること



事例5から分かったこと

- ◎ 幼児が遊びの中で、「やってみよう」と意欲をもって遊ぶことが何より大切であると改めて思った。そのためには、幼児の興味や関心に沿った遊びが展開できるように、環境構成をすることが大切である。
幼児が興味をもったこと(色や匂い)に関わり、「不思議」「面白い」「どうして」などと感じ、考えたり試したりして遊ぶための要因の一つは、**草花の種類(色)や匂いが多種であることが分かった。**
- ◎ 遊びの中で、気付いたり発見したりする喜びを感じることで幼児の「もっとやってみよう」「もっと試してみよう」という意欲につながると考える。**幼児自身が知らなかったことを知った喜び、できなかったことができた喜びを味わうことが「やってみよう」とする意欲につながると分かった。**
また、興味をもったことに繰り返し取り組むことで、予想して試したり考えたりするようになる。試すだけでなく、**予想して試すことで、予想通りできたときの満足感はより高まり、「今度は～してみよう」という意欲につながるのではないかと考える。**
- ◎ 幼児は、毎日のように石けんをすりおろしたり、草花を混ぜたりしてクリーム作りを楽しむ中で、試したり工夫したりして、様々な気付きをすることができた。失敗したり思うようにいかなかったりしても**もう一度試してみる時間、次の日に試してみることが出来る継続して遊ぶ期間等、十分な時間と場が大切であることが改めて分かった。**
- ◎ 考えたり試したりする際、友達の姿から刺激を受けることで、より遊びが深まることが分かった。また、友達と一緒に取り組むことで、考えが広がったり深まったりすることが分かった。
5歳児では特に、**友達と関わったり、友達のしていることや作ったものが見えたりする場の構成が大切であると分かった。**
- ◎ 保育者自身、今までこれほど多様な色のクリームを作ってみようと考えたことはなく、幼児が色々な色のクリームにこだわって試す中で、どんな草花を使うと抹茶のような濃い緑色ができるか、青でも薄い水色から濃い青まで微かな色の違いのあるクリームを作ることができることに気付いた。また、同じ緑色の葉でもすりつぶすと茶色く変色してしまうものがあったり、粘り気が出て、濃い緑色になるものがあったりすること気付いた。幼児と共に試したり考えたりして遊ぶ中で、自然の素材に関わる面白さや奥の深さを感じた。

事例6 「シャボン玉作りを通して」

5歳児 令和3年6月下旬～令和3年7月初旬

＜・昨年度の幼児の姿と♡保育者の願い、◆環境構成＞

- ・ 4歳児のとき、空き箱やトレー、卵パックなどを切り取り、穴を開ける形でシャボン玉の吹き口を作り、シャボン玉を飛ばすことを楽しんだ。

♡ 今年度は昨年度の経験を生かし、色々な素材を使って、工夫したり試したりすることを楽しんでほしい。

♡ 自分の願い（大きなシャボン玉を作りたい、たくさんシャボン玉が出てくる吹き口を作りたいなど）が達成された満足感を味わってほしい。

◆ 様々な材料や用具を用意しておく

材料（牛乳パック、プラスチックのトレー、卵パック、ラップやトイレットペーパーの芯、ヨーグルトの空き容器、プリンカップ、ペットボトル、空き箱等）

用具（はさみ、目打ち、布ガムテープ、ビニールテープ、セロハンテープ等）

6月25日（金）（吹き口や振り輪づくり1日目）保育の展開と援助	幼児の姿の読み取り、 保育者の思い
数人の幼児が、自分で好きな材料を選び、吹き口を作り始める。 ペットボトルをはさみで半分に切り、持ち手としてラップの芯を貼ったもの①、牛乳パックの底をはさみで切り取ったもの（写真6）、ボックスティッシュの箱の側面を一面切り取り、ティッシュの取り出し口から吹くもの（写真7）、ヨーグルト容器の底を切り取り、2つをくっつけたもの等（写真8）、ラップの芯を持ち手にして牛乳パックを切り取ったものを吹くもの（写真9）等、幼児がそれぞれ自分で考えてシャボン玉が出るか試す姿が見られる。 シャボン玉ができると「できたよ！」「できたよ！見て！」と周りの友達や保育者に知らせ、嬉しそうに何度もシャボン玉を作る姿が見られる。②ボックスティッシュの空き箱で吹き口を作ったA児は、次第にゆっくり吹くと大きなシャボン玉ができることに気が付き、ゆっくり吹き、「見て！大きなシャボン玉！」と何度も大きなシャボン玉を作る。③ その姿を見て、近くにいた幼児も「やってみよう！」と吹き口を作り始める。保育者は牛乳パックを3cm幅くらいに切ったものを4個つなげて、ガムテープで止めて、四角い振り輪を作り、幼児と一緒にシャボン玉を作ることを楽しむ。④	①ラップの芯を持ち手にするとは思わなかった。よく考えている。 ②自分で作った吹き口や振り輪が成功して嬉しい。 ③繰り返しシャボン玉を作っている中で、どのようにしたら大きなシャボン玉ができるか気付いた。大きなシャボン玉ができて嬉しい。 ④幼児の刺激になったらいいな。シャボン玉がいくつかくっついたものが出てきたら面白いだろう。

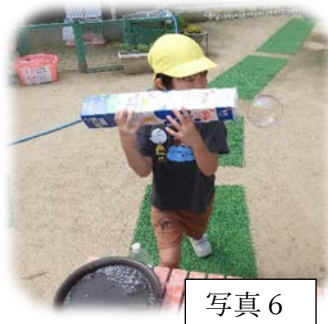


写真6



写真7



写真8



写真9

＜考察＞

☆ 昨年度の経験があるため、どの幼児も自分が作りたい吹き口をイメージして作る姿が見られた。②のように、個々の幼児が自分の吹き口でシャボン玉ができた嬉しさを味わうことができた。このことが翌日以降の「もっとやりたい」という気持ちにつながると考える。

☆ ①のように、保育者が予想しなかったような材料の使い方をする姿が見られ、子どもの発想の豊かさや考え方の柔軟さに驚かされた。また、紙の素材は、破れやすいが、そのことにも気付いてほしいと思い、空き箱を用意したが、③のように、保育者の予想とは異なり、何度もシャボン玉ができる吹き口を作る姿も見られた。これらのことから、保育者は固定概念にとらわれず、幼児の自由な発想から試したり考えたりすることができるよう、素材を用意しておくことが大切であると改めて気付いた。

6月28日(月) 保育の展開と援助	幼児の姿の読み取りと 保育者の思い	幼児が経験していること
A児は、ヨーグルトの容器を組み合わせて吹き口を作ったり、牛乳パックで作ったりしている。吹き口が1つできると、シャボン玉を作り、シャボン玉ができると、また次の吹き口を作っている。⑤B児は、牛乳パックを細く切ったものを6個作り、丁寧にビニールテープではり、時間を掛けて黙々と作る。出来上がると、「できたよ。先生!」と振り輪を見せる。⑥保育者が「すごいね。6個もシャボン玉が出てくるところがあるね」と言う⑦と嬉しそうににこっと笑う。そして、B児は「どんなのができるかな?」と言いながらシャボン玉を作る。⑧シャボン玉が6個つながったのができ、「できた〜!」と喜ぶ。⑨周りの幼児が「貸して」と言い、やってみる。「つながったシャボン玉ができたよ」と喜ぶ。何度かしているとビニールテープがはがれる。B児は「そうだ! ガムテープで修理しよう」と言い、ガムテープで貼ろうとするが、はがれる。 B児は「新しいの作ろう!」と言い、牛乳パックを再度細く切る。そして、「何で止めようかな。ビニールテープもガムテープもはがれるし・・・」と保育者に言う。⑩保育者が「ホチキスはどうか?」と提案する。⑪ B児は「それがいい!」と2階の保育室からホチキスを持って来る。 B児は、牛乳パックを細く切ったものを12個つなげた振り輪を作り、シャボン玉を作る。最初は2つ、3つしか出てこなかったシャボン玉が、何度もしていると12個全部出てくるようになる⑫、B児は「やったあ。シャボン玉がたくさん出てきた!」と喜ぶ。⑬ そばにいた友達も次々、B児の振り輪を借りてその場でくるり回りながらシャボン玉を作ったり、園庭を走ってシャボン玉を作ったりする。⑭	⑤試してみて、できるのが分かったら、別の素材や作り方で試している。 ⑥自分の力でできたのが嬉しい。認めてほしい。 ⑦保育者が作った4つのものから刺激を受けたのだろう。6個つなげてみるとどうなるか、試してみようとする気持ちが素敵だな。 ⑧わくわくしている。うまくいくことを期待している。 ⑨時間を掛け自分で作った振り輪からシャボン玉が出てきて嬉しい。 ⑩頑張って作ったのが、はがれるのは嫌だ。どうしたらいいかな。 ⑪牛乳パックを根気よく切って作っているのだから成功させてやりたい。 ⑫たくさんシャボン玉が出てくるまで諦めない。何としてでも成功させたい。 ⑬思ったとおり成功した。嬉しい。 ⑭B君の振り輪はたくさんシャボン玉が出て来るから面白い。	幼児が経験していること もっと、試してみたい 試してみよう うまくいった嬉しさ もう一度試してみよう 諦めない 予想通り、うまくいった嬉しさ

<考察>

- ☆ B児は、牛乳パックを6個つなげたシャボン玉の振り輪を作ったが、何度か遊んでいると壊れてしまった。直してもまた壊れてしまったが、新しいのを作ろうという気持ちになったのは、よほど、「誰も作っていないような振り輪を作りたい」という思いが強かったからだと考える。このような思いを抱いた要因は、金曜日にシャボン玉で遊んで楽しかった経験、これまでの工夫してモノを作る楽しい経験があったことが一因ではないかと考える。
- ☆ B児が牛乳パックを何で付けるよいか考え、行き詰ったとき、保育者は⑪のように提案した。B児が気付くまで待つべきか考えたが、今は成功した嬉しさを味わうことが大切なのではないかと考えた。ホチキスを保育者が1階の製作コーナーに用意していなかったこともあり、B児は2階の保育室までホチキスを取りに行った。幼児がどんな材料を使うか、どんな用具を使うのか保育者が予想して用意しておく、幼児に気付かせることができたかもしれない。幼児の姿や行動を予想して環境を整えておくことの大切さを改めて感じた。
- ☆ B児はすぐにはうまくいなくても諦めずに繰り返し取り組んでいた。これは、試してみてもうまくいった嬉しさを経験しているからではないかと考える。うまくいった嬉しさを経験すると、諦めないで取り組む姿や、さらに試してみようという意欲につながるのではないかと

と考える。

- ☆ B児は、牛乳パックを切ったものを 12 個つなげた振り輪を作った。最初はシャボン液が牛乳パックになじんでいないため、シャボン玉があまり出なかったが、根気よく繰り返すうちに、牛乳パックにシャボン液がなじみ、⑫のように、たくさんシャボン玉が出てくるようになった。保育者は牛乳パックにシャボン液がなじむとこんなにたくさんシャボン玉が出てくるとは予想していなかった。保育者自身も牛乳パックの振り輪でシャボン玉を作ることを楽しみ、「面白い」「もっとやってみたい」という気持ちを幼児と共有し、牛乳パックという素材の特性に気付いた。

6月29日（火） 保育の展開と援助	幼児の姿の読み取りと 保育者の思い	幼児が経験していること
B児は牛乳パックを細長く切り、ホチキスでつなげて大きな輪を作る。⑮（写真10）保育者が「長いのができたね」と言う。「大きなシャボン玉が作りたいんじゃ」と言う。出来上がると早速、シャボン液を付けて何度も挑戦するが（写真11）、うまくいかない。そばにいたC児が「これ（シャボン液入れ）が小さすぎるんじゃ。先生、もっと大きいの出して」と言う。⑯ 保育者がたらいを出し、たらいにシャボン液をたっぷり入れる。⑰しかし、B児が作った牛乳パックの輪は、たらいの直径よりやや大きい。 B児とC児は二人で一緒に輪を持ち、少しずつ折りたたみ、たらいの中のシャボン液に浸す。浸しては輪を持ち上げることを繰り返す。⑱たらいと持ち上げた輪の間にシャボン玉ができるが、たらいから離れるとシャボン玉が割れる。「あ～、もう少しだったのに・・・」とB児とC児は言うが、何度も繰り返す。⑲しばらくして、B児が「ゆっくりやったらいいんじゃない？」⑳と言う。C児「そうじゃな。そうしよう」と言い、何度かゆっくり輪を持ち上げると大きなシャボン玉ができる。2人は「やったあ！」と跳び上がって喜ぶ。㉑保育者や周りで見っていた幼児も「すごい！」「やったね！」と喜ぶ。しばらく大きなシャボン玉作りをする。 片付けのときB児が「あ～、おもしろかったなあ。」とC児に言う。㉒C児はB児の顔を見て、「うん！」と笑顔でうなずく。	写真10 写真11 ⑮昨日の経験から牛乳パックを選んだのだろう。 ⑯いいことに気付いたな。 ⑰大きなシャボン玉ができるといいな。振り輪が、シャボン液にしっかりつかないように、液をたっぷり入れよう。 ⑱悔しいな。きょううまくいくはず！ ⑲きょううまくいく。今度こそうまくいくはず。 ⑳ゆっくりすると割れにくいことに気付いた。 ㉑やった！成功した！嬉しい！ ㉒失敗を繰り返して成功したシャボン玉はすぐにできたシャボン玉より嬉しかったのではないかな。	幼児が経験していること 試してみよう 諦めない 試してみよう 試してみよう 諦めない うまくいった嬉しさ 充実感 満足感

<考察>

- ☆ B児は前日までの経験から、牛乳パックで振り輪を作るとよい、ということに気付き、大きなシャボン玉を作るために細く切った牛乳パックをつなげた。また、ガムテープやビニールテープでははがれるという性質を思い出し、ホチキスでとめていた。このように、B児自身が遊びの中でうまくいかない経験を乗り越えたことが、B児の知識や自分の力で作りたいものを作り上げる力になっていると考える。
- ☆ B児は大きなシャボン玉ができなくても諦めずに何度も何度も試している。これは、⑯のように気付いたことを教えてくれたり一緒に試したりするC児の存在があったことが大きく影響していると考え。一人では諦めたかもしれないが、同じ目的に向かって一緒に取り組む友達の存在があったからこそ、「きょううまくいく」と信じて繰り返し試してみることができたのだと考える。

- ☆ 保育者は、幼児が⑬のように発言したため、⑭のようにたらいを出し、シャボン液をたっぷり入れた。シャボン液が十分あることで、牛乳パックの振り輪にはシャボン液が染み込みやすく、大きなシャボン玉作りが成功したと考える。また、シャボン液が少なくなったら補充していたため、幼児は繰り返しシャボン玉作りを試すことができた。幼児が納得するまで試して遊ぶためには、十分なシャボン液を用意しておくことが必要であると改めて気付いた。
- ☆ 保育者は、昨年度の5歳児が大きなシャボン玉を作るためにフラフープに毛糸を巻いたものを使っていたことから、幼児から要求があればそれを出そうと思っていた。しかし、幼児は自分たちの経験から「牛乳パックがいい」と考え、自分でつないで大きな輪を作った。保育者は、牛乳パックで大きなシャボン玉ができるとは考えてもいなかった。ここでも保育者自身が大きな振り輪を作るときにはシャボン液がなじむように毛糸を巻く、という固定概念をもっていたことを反省した。幼児の活動や発想から、牛乳パックで大きなシャボン玉ができることに気付かせてもらった。
- ☆ ⑫のB児の言葉から、本日の遊びがB児にとって充実したものであったことが伺える。幼児にとって「うまくいった」ことが嬉しいのは当然ではあるが、何度も試して挑戦してうまくいかない経験を乗り越えて成功したことは、より充実感につながるのではないかと考える。

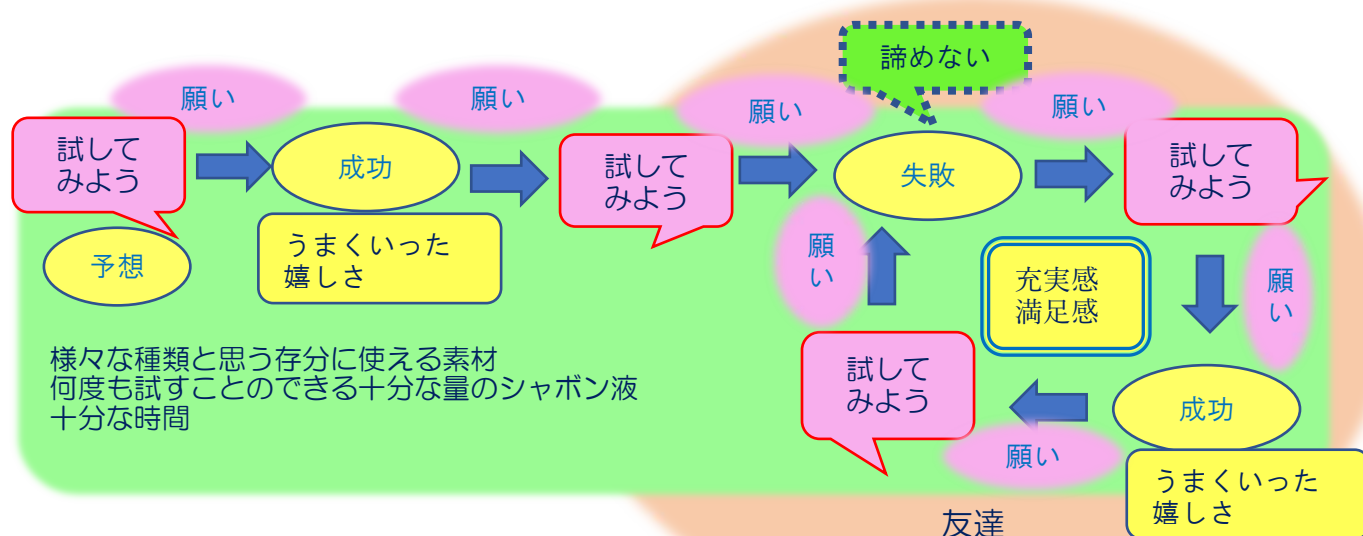
7月1日(木) 保育の展開と援助	幼児の姿の読み取りと保育者の思い	幼児が経験していること
登園後すぐにB児は牛乳パックを細く切ったものをつなげている。D児も同じように牛乳パックを細く切ったものをホチキスで止めている。⑬保育者が「D君もB君みたいな大きなシャボン玉を作るの?」と尋ねるとD児は「うん。」と言う。B児は、「ぼくは、今日はもっとたくさん作るんじゃ」と言う。⑭そして、保育者と一緒に⑮牛乳パックを切ったものを根気よくつなげ、1時間位時間を掛けて、35個の枠がある振り輪を作る。そして、できた振り輪をたらいのシャボン液につけて、手でもみながら、牛乳パックにシャボン液を染み込ませている。⑯しばらくして、B児は「もう、いいかな」と言い、振り輪を振り上げる。⑰ すると、たくさんのシャボン玉ができ、その場でくるくる回転すると、シャボン玉が出続ける。周りの幼児が「すごーい」「シャボン玉がずっと出てくる!」などと言う。B児は嬉しそうに、にこっと笑う。⑱	⑲B児の姿から刺激を受けて同じようにしている。 ⑳以前作ったものより「もっと」たくさんつなげたらどうなるか、試そうとしている。 ㉑B児と一緒に試してみよう。 ㉒牛乳パックを浸すだけではうまくいかないことに気付いている。 ㉓牛乳パックにシャボン液が染み込む具合を見計らっている。 ㉔成功して嬉しい!	試してみよう もっと試してみよう 充実感 満足感

<考察>

- ☆ D児は、シャボン玉遊びを始めた日から友達の様子をずっとそばで見ている。そして、友達の作った振り輪を使って遊ぶ姿は見られたが、自分で作ろうとする姿はなかった。そのD児が、自分も牛乳パックを使って振り輪を作ろうとしている。これは、自由に選んで使える素材が十分にあったこと、シャボン玉を作って遊ぶ場が継続的に用意されていたことが要因であったと考える。また、継続的に場が用意されていることで、D児のように、すぐには取り組むことが難しい幼児も、自分の「やってみよう」と思ったタイミングで取り組むことができたと考える。
- ☆ B児は、㉒のように、「今日は今までよりもっとたくさん牛乳パックをつなげてシャボン玉を作ろう」という自分なりの願いをもっている。これは、今まで、自分なりに「こんな振り輪を作ろう」という「願い」をもち、試行錯誤をした結果うまくいくという成功体験を繰り返したため、さらに「こんな振り輪を作りたい」という明確な「願い」をもつことができたことが要因であったと考える。
- ☆ ㉒、㉓の姿から、B児は前日までの経験により、シャボン液に牛乳パックを浸し、ある程度シャボン液が染み込むとシャボン玉がたくさんできる、ということに気付いている。言葉では表現していないが、感覚としてどのくらい浸すと牛乳パックにシャボン液が染み込むのか体得している。このことから、継続して繰り返し遊べる場を用意すること、試したり考えたりして十分に遊ぶだけの時間を確保することの大切さを改めて感じた。

事例6から分かったこと

- ◎ シャボン玉の振り輪や吹き口を作るためには、「シャボン液が染み込みやすい素材」を使うとよいことに幼児自身が気付いた。保育者は、幼児が試したり考えたり工夫したりすることができるよう、大人の固定概念を排除して、**様々な素材や十分な量の材料を用意することが大切であることが分かった**。また、十分な量のシャボン液があったことも、幼児が繰り返し試すことにつながったと考える。
- ◎ 保育者も幼児と一緒に遊ぶ中で、シャボン玉ができた嬉しさや面白さ、試してみる楽しさを共有することで、素材の面白さやシャボン液に浸す具合に気付くことができた。**幼児と共に遊び、体験を共有すること、気持ちに共感することの大切さ**に改めて気付いた。
- ◎ 「こんなシャボン玉ができるだろう」という予想をして、「**試す**」「**成功する**」という**成功体験**をすることで、うまくいかなかったときにも「諦めない」気持ちが育つと分かった。また、うまくいかない経験や失敗をしても「諦めず」取り組み、「成功した」嬉しさを味わうと、より「**充実感**」や「**満足感**」を味わうことができると考える。そして、「充実感」や「満足感」を味わうことがさらなる「今度はこんなふうに試してみよう」という気持ち、すなわち意欲につながるのではないかと考える。
- ◎ **一緒に取り組む「友達」の存在**があることで、うまくいなくても「諦めない」気持ちをもつことにつながる**ことが分かった**。また、互いに刺激を与え合ったり思いを伝え合ったりすることで、より考えが深まったり「試してみよう」という気持ちにつながったりするのではないかと考える。
- ◎ 「試す」「失敗する」「諦めない」「成功する」という経験を繰り返すためには、**幼児が「願い」をもっていること**、また、**幼児が試したり考えたりして十分に遊ぶための期間と、一日の選んだ遊びの十分な時間が必要であることが改めて分かった**。



6 成果と今後に向けて

(1) 成果

- 幼児がわくわく・ときどきしながら、「面白そうだな」「面白いな」と思って自ら身近な環境に関わり、試したり考えたりしながら主体的に遊ぶためには、十分な時間が必要であることが改めて分かった。また、幼児が試したり考えたりして、試行錯誤を繰り返しながら遊ぶ中で、失敗やうまくいかない経験をすることが、より「試してみよう」「やってみよう」という意欲につながり、また、そこで得た知識や能力が自分のものとなると考える。そのためには、**継続的に場を設けておくこと（ある程度の期間）と一日の選んだ遊びの時間を十分に確保することが有効であった**。
- 幼児が試したり工夫したりして遊ぶためには、幼児が「願い」をもち続けて遊ぶこと、また、「繰り返し」遊ぶことが不可欠であると分かった。その根底にあるものは、保育者が幼児の行動から幼児の興味をもっていることや感じていることを丁寧に読み取り、ふさわしい環境を整えることであった。**そのためには、日々の幼児の姿を記録し、読み取り、翌日の保育につなげていくことが有効であった**。
- 3歳児が「面白い」と思ったことに関わり、納得いくまで繰り返し遊ぶためには、**保育者が、受容し、寄り添い、様々な感情に共感し、思いが実現するように手助けをした環境としての保育者の関わりが有効であった**。年齢が低い時にしっかり「面白い」「やって

みたい」という感情を体験し、自ら環境に関わろうとする意欲を育むことが大切であった。

- 幼児が「面白い」「不思議」「びっくり」など科学する心を育むために必要な感情体験をするためには、可視化することが有効であった。特に、植物の生長や小動物の様子、色など、言葉だけでは明確に伝わりにくい事象については、可視化することで幼児同士で共有ができ、幼児の興味や関心が高まり、翌日の遊びにつながった。
- 幼児が興味ある遊びを楽しむ際、友達がいることで、新たな考えに触れたり、諦めない気持ちにつながったり、楽しい気持ちを共有したりすることができた。幼児が心ゆくまでしたい遊びに取り組むためには、友達の存在が大きく影響していることが分かった。保育者が、発達に応じて友達と関わることをできる場、共有する場を設けることや友達とつながっていく等適切な援助を行うことが有効であった。
- 幼児が心ゆくまでしたい遊びに取り組み、科学する心を育むためには、発達段階に応じて、必要な経験を積み重ねることが必要であると考えた。そのためには、全職員で育てたい幼児の姿に向かうために幼児が経験することや感じることを共通理解したことが有効であった。そして、日々の終礼で、その日の幼児の姿から「科学する心」につながっている姿に視点を当て、話し合い、幼児の姿を読み取ったり、環境の再構成を考えたりしたことが、職員の育ちにもつながった。

(2) 今後に向けて

- 幼児が「わくわく・ドキドキ」しながら「もっと～したい」「もっと～してみよう」と願いをもって身近な環境に主体的に関わっていくためには、幼児が自由に使ったり用いたりできる環境が必要である。
今後、園の環境をさらに見直し、遊びに使える草花を増やしたり、遊びの場の在り方を見直したりしていきたい。
- 幼児が試したり考えたりして遊ぶ中で、保育者自身様々なことに気付かされた。保育者自身が視野を広げ、教材研究を重ねることで、幼児はさらに試したり考えたり工夫したりして遊び込むことにつながると考える。
今後も、保育者自身が科学する心をもち続け、知見を深めることで、幼児が興味をもったものごとに「面白い」「試してみよう」「もっと～してみよう」と心を動かして関わるようにしていきたい。
- 保育者の「～に気付かせたい」「このような経験をさせたい」という思いが強すぎると、幼児の本当に興味をもっていることを見誤ったり、幼児の気持ちを十分受け止めることができなかったりして、幼児にとって適切な声掛けができないことがあった。一方で、職員同士で記録をもとに事例検討や日々の保育についての反省を行うことで、幼児の見取りが深まったり、自分の保育を見直したりすることができた。
今後、記録を取る時間を勤務時間内に確実に確保したり、ビデオカメラや写真を用いて記録の取り方を工夫したりすることで、幼児理解を深め、幼児が「わくわく・ドキドキ」する生活につなげていきたい。また、事例検討やエピソード記録についての職員研修の場を定期的に設け、保育者の資質向上に努めていきたい。

研究代表者

藤井 祥子

執筆者

山口 晴子 上島 香緒里

板野 聖奈 斉藤 美樹